# お別れ会をしませんか？

快丈凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お別れ会をしませんか？

【Ｎコード】
Ｎ２７６２Ａ

【作者名】
快丈凪

【あらすじ】
別れた彼女から3日ぶりに来たメール。それはお別れ会への案内メールだった…。

『お別れ会をしませんか？日曜日の１０時、いつもの場所で待ってます。』

別れた彼女から来た、３日ぶりのメール。

お別れ会？俺から振ったのに…。今さら何をする気だ？

そんな思いを抱えながらも俺はメールの場所に来ていた。
そこは付き合っていた頃にいつもの待ち合わせしていた場所で、丁度別れたあの日もここで待ち合わせてた。

５分前に着いた。待ち合わせ場所は俺たちの両方から近くにある公園で、大きな日時計の前だった。

行くと、もう彼女は来ていた。俺の来る方向と全く逆の方向を見て、俺を探していた。

「ごめん、遅くなって…早かったな…」
俺が声をかけると、彼女はいつものような無邪気な笑顔で、
「来てくれたんだ！私は全然待ってないよ。じゃ、行こっか？」
と言いながら俺の服の袖を引っ張り、歩き始めた。

俺は詳しく聞かなかった。
なんでお別れ会なんてものをするのか、これからドコへ行く気なのか…。

やがて彼女は服の袖から手を放し、俺の横を歩いた。でも手を繋ご

うとはしなかったし、前より少し離れて歩いている。

彼女に別れを告げたのは俺だ。
俺たちは、このまま一緒にいても良い方向へ行くとは思えなかった。
このままぐだぐだ付き合っているぐらいなら、友達に戻った方が良い…そう思った。

別れを告げても、彼女は笑顔だった。いつものような無邪気な笑顔ではなかったが、その時彼女にできる精一杯の笑顔だった。

彼女と俺はバスに乗った。…行き先は分かった。
冬目前の、１１月には不似合いな場所だった。

バスは、俺たちしか居なかった。
「貸しきりみたいだね」
彼女はそう言って少し笑った。
俺も笑った。

ゆっくりと揺れるバス。途中で乗り込む客は無く、俺たちだけ。

バスでも、俺たちは無言だった。どちらもあまり話さない方だったが、前はもう少し話せたかな…。

ふと隣に座る彼女を見る。
あれっ…。
こんなにまつげ、長かったっけ？
指も細い。
背は低い方ではないハズだけど、こんなに小さかったっけ？

…彼女が変わったんじゃない。

3日で変わるハズない。
俺がちゃんと見てなかっただけだ。
何だか、彼女の彼氏だったという事に自信が無くなった。…俺は彼女の事…何も分かって無かった…。

バスが目的地に着いた。
俺たちは降りる。
着いたのは、海だった。
潮風が冷たい。
俺たちは砂浜に腰かけた。お互い少し離れて座った。
「ちょっと寒かったかな…ここ来るって分かった？」
彼女は笑顔で聞いてくる。
「…うん。バスに乗ったから…」
…ちょっとそっけなかったかな…。
言った後に気づいたけど、彼女は動じていなかった。
「そっかぁ…」
彼女はそう言って海を見た。
俺も海を見た。
「はじめてのデート…覚えてる？去年の夏のはじめ…7月ぐらいかな…こんな風に海岸に座ってたよね…人は…もう少し居たかな…」
確かにその時、何組かのカップルが居た。まだ付き合いはじめの俺たちは、雰囲気に耐えきれず、スグに帰ってしまった。
「なんか…懐かしいね…」

ボソッと彼女が呟く。
「…あのさ…」
俺は彼女に少し近付いて言った。
「お別れ会って…コレ？昔の思い出を振り返る会なのか？」
なぜかケンカ腰の俺。

すると、彼女は俺をジッと見た。そして少し微笑んで言った。
「本日を持ちまして、私は正式にアナタの彼女では無くなりました。今までありがとうございます。これからは、良い友達になって下さい」
彼女は一気にこれだけ言うと、急に立ち上がった。そして俺に背を向けて言った。
「今日は日曜日にも関わらず、私のワガママに付き合ってくれてありがとうございました。…でも…」
振り返る彼女。
「私…アナタの彼女で良かったです…」
大きな可愛らしい瞳から、大粒の涙がこぼれる。
俺はその場から動けない…。

「誠に勝手ながら、以上を持ちまして、お別れ会を終了致します。ありがとうございました」
彼女はそう言って笑った。
笑っているハズの目から、まだ涙が止まらない。

俺は言葉を無くした。
頭のなかが真っ白だ。
でも…一つだけ確かな感情があった。
…こんな一方的な会…認めない…。

俺は再び背を向けて、帰ろうとする彼女の手を掴んだ。

「何がお別れ会だ！未練ありすぎなんだよ！俺は認めない！」
そう言って俺は気がつくと、彼女を抱き締めていた。
「…別れたくないなら…ちゃんと言えよ。こんなの…ズルイよ…俺が悪者みたいじゃん…」
すると、黙っていた彼女は話はじめた。
「…ならさ…言うよ。私、別れたくない。もっと一緒に居たい…。私…まだ好きなんだよ…。」
震える声で…でも一生懸命に言う彼女。
その姿がたまらなく愛しい。

「好きだよ…」

彼女は驚いた目で俺を見上げる。
俺は彼女を見る。

「…また…やり直そうか…？ちょうど海に居るしさ…」
俺は照れながら言う。
彼女はまた、あの頃の笑顔で俺に笑いかける。

俺らのお別れ会は失敗に終わった。

そして…俺たちは2度とお別れ会をする事は無かった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2762a/

お別れ会をしませんか？

2010年10月28日06時47分発行